第12期 第2回 府中市美術館運営協議会 会議録

- 日時 令和5年7月30日（日）午後2時～午後4時
- 会場 府中市美術館 会議室
- 出席者 橋本会長、隠岐副会長、芹澤委員、高橋委員、岡村委員、真住委員、水橋委員、加賀美委員、金田委員、吉田委員、森下委員
- 欠席者 瑞慶覧委員
- 事務局 藪野館長、鎌田副館長、大木副館長補佐、尾崎管理係長、志賀主任学芸員、小林管理係員、渡部管理係員（途中退席）、松尾学芸員（途中退席）
- 傍聴者 なし

事務局：

本日はご多忙のところ、府中市美術館運営協議会に御出席いただき、ありがとうございます。ただいまから会議をはじめます。私は府中市美術館の鎌田と申します。議題に入るまでの進行を努めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

本日の出席状況ですが、12名の委員のうち11名のご出席をいただいております。過半数を超えておりますので、会議が成立していることをご報告いたします。

次に、資料の確認をいたします。

事前に送付したものが、第12期第2回府中市美術館運営協議会次第、資料1：府中市美術館近年の活動の成果、資料2：府中市美術館年間スケジュール、それ以外に、本年2月に開催した第1回運営協議会の会議録（案）、第12期府中市美術館運営協議会委員名簿の5点となります。

また、本日、机上に配付させていただいたものが、現在開催中の所蔵品展「ぼれたんサマー むら田もいっしょ！」のチラシ、「公開制作今井俊介」のチラシです。

以上、資料など手元にないものとかございませんか。

本日は、第12期府中市美術館運営協議会の第2回目の会合となります。本日は、遅くとも午後4時には終了したいと考えております。次第に沿って進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、次第2、運営協議会会長御挨拶を、橋本会長よりお願いいたします。

会長：

皆さん、こんにちは。お暑い中、御参集いただきましてありがとうございます。

今、まだ夏ですけれども、そろそろ府中市美術館の来年、再来年のことをいろいろ考えながら活動されていらっしゃると思いますが、特に来年度は、輸送業界のトラックの運転手さんの働き方改革とか、輸送業界、ものすごい経費が上がる。そんなことも含めて、今、苦勞しているところですが、燃料費の高騰とか、それから海外から作品を運ぶ際の運賃とか、本当にこれからますます厳しい状況に美術館は置かれると思います。

こちらの美術館もだいぶ時間がたってきて、今回の設備ということが一つの諮問の内容に

入っておりますけれども、老朽化とか、改修とか、お客様をどういうふうにお迎えするかという視点で、皆さんでご議論いただいて、そして、何か我々が、府中市美術館のためになるような意見をまとめることができれば、と思っています。よろしく願いいたします。

事務局：

ありがとうございました。続きまして、次第3、藪野館長、お願いします。

館長：

本当に暑い、こんな暑い夏は初めてじゃないかというぐらい暑い夏ですが、いらしていただきましてどうもありがとうございます。

私たちの美術館は2000年に開館しまして、23年間たつわけですけど、今、ちょうど橋本会長からトラックの話、運営の話が出ましたが、1930年代、随分昔のことですけれども、私がいたマドリードの町にプラド美術館という美術館があって、そこで1936年から39年、内戦がありました。もう大変な共和国側とフランコ側の戦いがあって、そのとき美術館の近くに至近弾が落ちましたので、急遽、プラド美術館の主要な作品を全て移動しようということになった。

これについては、今でも本当にそれでよかったのかということをおっしゃっていただいておりますけれども、たまたま奇跡的に出したものが、1.5ヤードの作品で傷ついたものがありますけれども、無事に戻ってきたということがあります。その戦争中、共和国のほうは、余分なトラックが全然ないので、それを全部かき集めまして。ガソリンもない。ガソリンも全部、美術館のために供給して。そしてその情報はもちろんフランコ側にも伝わっていたのですが、一つの共通の意識があって、つまりこれらの作品は自分たちのものではない、次の世代のためにバトンタッチしなきゃいけないという共通の認識があったために、作品が箱に詰められて、まずマドリードからバレンシア、バルセロナ、そして最終的にはスイスまで行きました。そして1939年に戦争が終わったときに、それらが戻ってくるという、そういう3年間の旅をしたわけです。

その中にはベラスケスの「ラス・メニーナス」のような作品がありましたし、主要な作品全部があった、しかも1939年というのは第二次世界大戦直前ですから、交通の便が極めて困難なときに、それら全てが戻ってきたということです。それも一重に、私たちに対して作品があるのではなくて、次の世代にそれを受け継がせなきゃいけないという、美術館というのは多分、次の世代の子供たちが、あるいはその次の世代にも脈々と伝えていかなきゃいけない、そういう使命を持っているのではないかというふうに思います。

今ちょうど「ぱれたん」の展示会をやっていますけれども、子供たちが嬉々として見ていて、昨日も木曜日にも1人の男の子が、「僕、帰りたくない」というふうに散々泣き叫んでいて、それは非常に嬉しいことでありました。何かの形で、そういう印象を残すようなふうに、美術館を運営していきたいなと思っています。

どうぞ、皆さんいろいろお話をされて、ぜひ諮問に繋げていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

事務局：

それでは、次第4、新任委員及び異動職員の紹介に移らせていただきます。

第1回の会議ではご欠席されましたが、第12期運営協議会の新任委員として、府中市立新町小学校校長の高橋委員、原爆の凶丸木美術館学芸員・専務理事の岡村委員に新たにご就任いただいております。

また、前回まで委員をお願いしておりました府中市立府中第三中学校校長の持田委員が異動されたため、府中市立府中第十中学校校長の芹澤委員に新たにご就任いただきました。

委嘱状の伝達は、本来ならば館長から直接お渡しするところですが、時間の関係もごさいますので、机上に委嘱状を置かせていただいております。これをもって委嘱状伝達に代えさせていただきますので、よろしく願いいたします。

それではお手数ですが、芹澤委員、高橋委員、岡村委員の順に、一言ずつご挨拶をお願いいたします。

委員：

府中第十中学校校長の芹澤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私、教科は美術ではなく社会科なのですが、学校関係者の枠ということで、持田先生に代わり今年度委員としてお世話になることになりました。微力ですがお役に立てればと思ひますので、どうぞよろしくお願いいたします。

委員：

府中市新町小学校校長の高橋と申します。新町小学校の校長2年目となります。私も美術畑ではなく、体育畑を歩んできたのですが、精いっぱいやらさせていただきます。

僅かな関わりでいえば、私の弟が東京都の小学校で凶工の教員をやっているのと、娘が、今、NHK Eテレの「ノージーのひらめき工房」をご存知ですかね。それにハマってしまって、一緒に土曜日、日曜日は、毎週工作に励んでいます。よろしくお願いいたします。

委員：

埼玉県の東松山市にあります原爆の凶丸木美術館の岡村と申します。

丸木美術館で働いてもう23年目になるのですが、うちの美術館はもともと、丸木位里、丸木俊という画家夫婦が、自分たちで自分たちの絵を展示するというために造った美術館です。公立美術館のコレクションや運営の在りようとは、ある意味全く違うというか、この美術館が大事で必要だと思ったださる方が支えてくれている限りは続いていくみたいな、そういう野良犬のような美術館であり、私がどういうことを府中市にできるかというのが、本当にいささか自分の中でも不安を抱えながら、今日は参りました。

ただ、私自身は立川市の生まれで、高校が立川で大学が八王子だったりもするので、多摩地域にこうした本格的な美術館ができたということは、とても開館したときにうれしく思ったということを覚えていますので、微力ながらお力になればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局：

ありがとうございました。

続きまして、この4月に当館でも人事異動がありましたのでご報告いたします。

まず、相馬副館長が異動し、後任として、私、鎌田が副館長に就きました。また、新たに大木副館長補佐を迎えております。

管理係では、古田事務職員が異動し、渡部事務職員が着任しました。学芸係では、本日所要により欠席しておりますが、神山が学芸係長に着任。新任学芸員として松尾、及びこちらも本日欠席しておりますが、竹上の2名が着任しております。

新たに着任した職員より、それぞれ簡単ではございますが御挨拶させていただきます。

(大木・渡部・松尾が自己紹介)

事務局：

新しい職員を迎え、府中市美術館の活動もより清らかな気持ちで取り組んでまいります。引き続き、よろしくお願いいたします。

恐れ入りますが、渡部と松尾はここで退席させていただきます。

それでは、これから次第に沿いまして会議をはじめます。次第5、議題に入らせていただきます。ここからの議事は、橋本会長、よろしくお願いいたします。

会長：

それではまず、傍聴希望者つきまして、本日は希望者がいらっしゃらないということですので、このまま進めさせていただきたいと思います。

初めに、皆さんに美術館のほうからお送りしていただいた第1回の運営協議会の会議録、これについて事前に特に修正などは御意見がなかったというふうに事務局から聞いておりますけれども、それでよろしいでしょうか。

(異議なし)

では、議事録については修正なしということなので、これで確定させていただきます。

それでは、まず議題の1、諮問事項でもある「府中市美術館の利用拡大 事業・施設の在り方について」ということで、参考となる資料もあるようですので、改めてこの諮問内容について、事務局よりご説明いただきたいと思います。

事務局：

前回の運営協議会、令和2年12月から令和4年11月に開催しました第11期府中市美術館運営協議会では、「府中市美術館の望ましい姿」というテーマで協議いただき、当館の作品収集活動、展覧会活動、教育普及活動、広報情報発信活動、そして施設整備について、様々なご提言をいただきました。

今期、第12期の運営協議会では、その成果を踏まえながら、特に美術館の利用拡大につながるような事業の拡充、充実や施設の整備について、御意見をいただきたいと存じます。

令和2年以降のコロナ禍を転機に、社会の利用や価値観は大きく変化しているように思われます。また、開館以来24年目を迎える当館では、施設や設備の老朽化も課題となっており、近い将来に改修の必要性も高まっています。こうした社会状況や当館の現状を踏まえながら、建設的な御意見を賜ればと存じます。

なお、利用拡大という言葉を冠していますが、単に施設利用者増を求めているわけではなく、府中市民をはじめとする多くの方々に当館のことを知ってもらい、親しみを持ってもらうため、幅広い視点からご発言をいただきたいと存じます。

御参考まで、資料1、府中市美術館近年の活動の成果をお手元にお配りしておりますので、そちらで当館の現状をご説明いたします。

資料1のほうを併せてご覧ください。

こちらには、令和3年度と令和4年度の事業実施状況及び本年度、令和5年度の主な事業計画を記しています。

まず、当館の活動の方針、中心となっていくものですが、府中市美術館では江戸時代から現在に至る洋画を中心とした日本の美術、そして府中、多摩の美術、それから現代美術という3つの方針を掲げて作品の収集を進めるとともに、展覧会等の実施もこれらの方針に沿う形で展覧会の立案、企画、そして実施を行っております。

まず、作品収集の活動ですが、令和3年度には6点の作品を購入、令和4年度、昨年度は4点の作品を購入、10点の作品の寄贈を受けています。そして、本年度、令和5年度ですが、54点の作品の購入を予定しております。この54点のうち52点については、大正から昭和初期にかけての版画作品、創作版画の一括購入という形になります。

これら作品購入の資金ですが、平成29年度末に府中市では美術品収集の基金2億円を用意いたしました。これを4年間、ですので、平成30年から令和3年度まで運用し、その段階の残高や収集実績等を見て、令和3年度、再度金額を2億円に戻しております。ですので、令和3年度末に2億円になりまして、令和4年度、それから今年、さらに来年、再来年、令和7年度まで、この2億円の基金を運用活用していく形になります。

なお、今年度末、今年度の54点の作品を購入した段階での基金残額の予定額が、約1億2,800万円になる予定です。

続いて、展覧会活動についてです。

いずれの年も5本の企画展と1本の所蔵品を中心とした展覧会、合わせて6本の展覧会で組んでいます。ただし、3月から開催した展覧会については、翌年の5月まで開催を続けますので、年度単位でいきますと、一応6本の企画になっていますが、1年間を企画展4企画、それから所蔵品展1企画、5企画で順繰り回している形になります。

令和3年度ですが、開館日数が228日で、全体の企画展の来館者数が7万1,839人になっています。この年は、令和2年度にコロナの大規模な流行があり、その影響がまだ依然として残っていた年になります。府中市美術館でも、4月25日から5月30日まで、開館日ベースで24日間を臨時休館としております。

令和4年度、昨年度ですが、この年は259日間、臨時休館することなく開館を行いました。

て、年間の入館者数が8万1,127人になっています。この8万人強という入館者数は、近年の府中市美術館の入館者数の平均的な数字、一つの目安、目標となる入館者数になっております。

そして、今年、令和5年度ですが、年間の開館日数は254日間となっております。各展覧会の内容、概要につきましては、資料2、府中市美術館の年間スケジュールのほうを改めてご覧いただければと思います。

今年度の展覧会としては、5月から7月に開催しました植竹邦良展。こちらは主に戦後活動した府中ゆかりの油彩画家の展覧会です。全国的な知名度はまださほど高いとは言えないのですが、地元ゆかりの、そして個性的な活動を展開した作家として紹介いたしました。新聞などでも取り上げていただくなどと、改めてこの作家の画業の再評価に繋がられたのではないかと思います。

現在の展覧会は、夏休み時期の企画として「ぱれたんサマー むら田もいっしょ！」という企画を、夏休み期間、そして9月の頭まで開催しております。秋には、インド細密画の展覧会を予定しております。日本の美術館ですと、多くがヨーロッパ、欧米の美術作品、あるいは日本の美術作品を紹介するものが多く、それ以外の地域の作品の紹介というのはなかなか行われませんが、今回の展覧会は、国内のコレクターが所蔵しているインドの伝統絵画を紹介する企画となっております。

そして、冬場には、現代作家、白井美穂さんの企画展を開催いたします。1990年代から活動を続けてきた方で、映像、写真、立体、インスタレーション、そして絵画、様々な領域で作品を作っている方になります。

そして3月からは、毎年恒例となっておりますが、江戸時代の美術に焦点を当てた企画、春の江戸絵画まつりシリーズの一つとして「ほとけの国の美術」という展覧会を開催します。仏教、あるいはその教えを背景として作られた日本の美術という視点で、様々な作品を紹介していくこととなります。

続きまして、近年の活動ですが、資料の裏面のほうをお願いいたします。

教育普及活動ですが、当館の特徴的な活動としては3つのものがあげられます。

まず1つ目が公開制作、2つ目がアートスタジオ、3つ目が小中学校美術鑑賞教室です。

まず、公開制作ですが、1階の公開制作室というスペースで、現在活躍中の現役作家の方に来ていただいて、作品の制作を行っていただく。そして、その様子を来館者に見ていただき、完成作品を同じスペースで紹介するという内容のものです。大体、年間3企画程度を実施しております。

2つ目がアートスタジオ、公開制作室に隣接する創作室という部屋を主な活動室としていますが、いわゆるワークショップを開催している企画になります。

そして、3つ目が小中学校の美術鑑賞教室。こちら府中市の市立の小学校及び中学校を対象とした事業になります。府中市には市立小学校22校、それから中学校が11校ございます。小学校については、いずれの学校も、4、5、6年生のうちの1学年の生徒全てを美術館に来ていただいて、学芸員の案内のもと展覧会を鑑賞してもらいます。ですので、府中市立の小学校に通っている子どもたちは、その生涯で1回は美術館に来ることになります。加えて中学生の場合、こちらは主に夏休み期間の課題として、美術館に来てくださいと

いうことを、学校を通じて案内しています。ですので、小学校では1回、中学校で1回、義務教育の中で美術館に来るということになります。

これ以外に、展覧会ごとの企画、講座ですとかワークショップ、それから市外の小中学校や大学等の団体鑑賞等の連携の事業を行っています。

それから、4番目の活動として、市民ギャラリー、当館の1階に市民ギャラリーという貸出し用のスペースがあります。そちらの利用実績もあげております。教育普及活動、市民ギャラリーの入場者数、いずれもそうですが、やはり令和3年度はまだコロナの影響が残っています。令和4年度になると、それがだいぶ上向きになっています。市民ギャラリーについては、まだ令和4年度も少し出足が鈍っているのですけれども、今年度はさらに増加するのではないかと思います。

最後に、その他の特記事項をあげております。

こうした美術館の事業以外に、この近年、今年も含めまして、美術館が取り組んでいる主な内容になります。まず、令和3年度、一昨年ですけれども、この美術館の全館の施設設備、建物の状況から機械設備の状況まで含めて、劣化診断の全面的な調査を行いました。昨年、令和4年度には、この劣化診断の調査結果を含めて、竣工後60年目まで、ですので、この後35年間ほどの期間の長期的な改修の計画、それからトータルでそれまでに幾らぐらいかかるのか、どの時期にどのような工事をすればいいのかというような目安となる改修内容の検討を行ってきました。

これが、直ちに美術館の改修に直結していくというわけではないのですが、美術館をどのようにこの先維持していくかという、これから財政当局等と折衝していく中のための一つの材料となる数字になっています。

それから昨年度、もう1点、かねてより懸案になっていたんですけれども、当美術館の所蔵作品をデジタルデータベースで管理していこうという課題がありまして、そのための取組として、まず所蔵作品の全画像データ、古いものはやはりフィルムベースで持っていたものが多いのですけれども、それらのフィルムを全てデジタル化する作業というのを行いました。

今年度、それらのデジタル化したデータを使いまして、所蔵品のデータベースを構築します。このデータベースは、内部的には作品の管理に使うとともに、作品の画像、それから作家名、作品名、寸法等の基本データについては、ウェブ、インターネットを介して公開していく、それぞれの方が府中市美術館の作品を作家名ですとか、作品名等で検索できるというデータベースを公開していく形になります。

それから、今年度の美術館として取り組む大きな事業として、11月下旬から12月下旬まで、収蔵庫の全室燻蒸。この中には収蔵されている全ての作品も含まれます。開館以来行っていなかったんですけれども、燻蒸作業を行うことによって、文化財害虫、それからカビ類等の状況を一度リセットするものです。

それから、今回の冒頭でも御紹介しましたが、今年4月1日付で学芸員2名を新規に採用しております。1名が教育普及担当、もう1名が近世絵画を専門としている学芸員です。

現在の美術館の学芸員は、私を含めまして、全部で9名です。ただ、数年後には開館当初から携わっていた職員2名が退職ということになりますので、これらの世代の入替えも考えて、少し早めの時期に採用して後継者を育成していこう、という状況になっております。

以上で事務局からの説明を終わります。よろしくお願ひいたします。

会長：

ありがとうございました。

多分、ここで美術館に携わっている方は、大体、今の話が、ああそうかという感じだと思いますが、ちなみに少し私なりに補足させていただきます。まず作品の収集ですね。ここで購入のための基金が、こういう時代の中にあって2億円も持っていらっしゃるといのは、本当に立派なことです。これはなかなかないです。それで、実際に1億2,800万円ですから、7,200万円を使われて、その7,200万円を放置しないでちゃんと2億に戻しているといのは、大変立派なことだと思うんですね。これはもう、ぜひ皆さんからも評価していただきたいし、市のこういう文化への取組といのは立派だよ、ということ、周りの方たちにもお話ししていただければと思います。

ちなみに、私どもの美術館の基金は1億あったんですが、7,000万ぐらいまで減ったところで、それが20年ぐらい前の話ですね。延々と補充されずに寄贈に頼っている状態です。しかもコロナで、結構、うちの区では地域に色々なライブハウスや小劇場があって、その支援でお金を使って、今、3,000万円を切っていて知らん振りされているという、もうどうにもならないという状況ですけども、本当にそこは、府中市は立派だなと。

それから展覧会活動も、本当にどの展覧会も充実されているし、夏休みは夏休みで子供たちのことをいろいろ考えて事業を展開されていますし、それから日本美術の所蔵品を非常にうまく活用した展覧会をされているということで、本当にバランスのとれた活動をされているなというふうにも思っております。

教育普及活動のほうも、さすがに令和3年は小学校が1校、中学校が1校いらっしゃらなかったということですけども、昨年度は全校いらしたということになりますよね。これは本当に大事なことで、私どもも1986年に開館して以来、小学校4年生と中学生は全員来ていますね。コロナで一番激しかった時はさすがに中止になりましたけど、これは、将来子どもたちが美術館というものを小さいときに体験しているか、していないかということがとても大きいですね。やはり変な話ですけど、大人になってからちょっと飲みに行こうかといったときに、行ったことのある居酒屋のほうで安心して行けるみたいなのがあるところがあって、やっぱりそういう文化施設に入るのは、最初はちょっと敷居高いと思うんですよ。そのところを小さい頃に敷居を下げておくということですね。だから、むしろ何を見たかではなくて、「美術館に行った」という経験がすごく重要で、そういうことで継続されていらっしゃるといのはとてもすごいことだと思います。

ギャラリーのほうも、これだけのお客様が御利用されているということはすごいことだと思いますので、これちょっとそれぞれに利用者数とか来館者数を分けて書いていらっしゃいますけれども、例えば令和4年度のところにちょっと足し上げてみると、企画展、それから普及事業に参加された方、それから市民ギャラリーに使われた方と合計してみると、大体16万4,000人ぐらいなんです。その16万以上の方がここを利用されているということは、本当にすばらしい実績だなというふうに思っています。

あと、学部員の数9名といのは、これ多いのか少ないのか全然お分かりにならないと

思うんですけども、多いと思いますね。それで普及事業もこれだけやられていて、むしろ9名でこれだけの事業を回しているのかなというところが、ちょっと僕からすると驚きというか、大変な御苦勞があるのではないかというふうに思っています。

それから後継者の問題、学芸員はなかなか入れ替わりがないので、計画的に20年後とか30年後とかを見据えて採用していかないと、後でおかしいことになってしまう。その時その時でこの人ほしいからと採用していると、後々とんでもないことになってしまって、やはり年代構成とつながりとか、冒頭に館長からお話がありましたけれども、将来に文化的な資源を残していくという仕事を継続するためには、それを担う人材育成、これが非常に重要なことではないかと。後継者育成ということがさっきお話に出ましたけれども、将来にわたった計画のもとに動かれているなという印象を得ました。

自分たちのことは自分たちで褒められないと思いますので、ちょっと補足させていただきました。その上で、これまでの実績について皆さんからご意見とかご質問があればお答えさせていただきたいと思いますので、いかがでしょうか。

委員：

今回の諮問の「利用拡大」ということは、先ほどご説明はいただきましたけれども、要するに美術館事業からの枠を外れて拡大しようと言われているのか、それとも事業の幅を広げて何か、やってくれと言われているのか、どっちなのかなとちょっと思ったんですが、何か総合計画の中でも同じようなことが書いてあったので、誰かがそういうことを希望していたのかな、と、ちょっと勘ぐってしまうのですが。

事務局：

いえ、特に誰かの希望で設定したというものではございません。

この美術館が二十数年たちまして、ある意味、府中市の中でも、全国的に見ても府中市の美術館の存在感といいますか、あるいは特徴というのは、一定以上の評価はただけてきているかなと。ただ、今、その状況にだけ満足してしまいますと、すぐにその活動が陳腐化してしまったりする。もちろん、今、やっている活動が完全なものだというふうに思っているわけではなくて、まだまだ足りないところ、こういうこともしてほしいとかいうところもあるかと思います。それはなかなか中に居て分かることでもないですので、こういう機会を生かさせていただくというか、皆さんからさらにこんなことをしてもらいたいとか、そういった応援も含めて、ご意見いただけるとありがたいなと思っています。

委員：

何か、結婚式やれとか縁日やれとか、そういうことではないんですね。

事務局：

やれと言われているわけではございません。

委員：

安心しました。

会長：

他にいかがでしょうか。

委員：

凄い活動をされているということは色々伺っていて、特に今回この間見せていただいたんですけど、植竹邦良はもう本当に私も初めて作品をまとまって見る機会となりましたし、従来の美術史からなかなか評価されない作家が取り上げられているというのも立派な活動だなと思いました。

その中で、それともちょっとつながってくる場所なんですけれども、市民ギャラリーの活動というのは、これは基本的には市民の方に貸し出すということによろしいでしょうか。1週間とか期間が決まっているのでしょうか。

事務局：

1週間単位で貸し出しをして、それぞれの企画を行っていただく形になります。利用者については、市民に限定しているわけではなくて、市外の方でも利用可能です。ただ、府中市の施設ということで市内に関係のある方、居住者であるとか、通勤しているとか、活動の主体があるという方と、それ以外の方では利用料金の設定を変えています。市外料金は市内料金の倍になりますので、市民に若干還元しているということになります。

委員：

わかりました。私自身も貸しギャラリーを美術館の中で設置しているので、何か自分のことも顧みつつ感じることもなのですが、そうした市民ギャラリーの貸出事業みたいなことは美術館の活動としてアーカイブ化されることはあるのでしょうか。

事務局：

当館の活動報告、年報のほうにはどのような企画を行ったかという名前と期間はあるんですけども、全てどんな出品作があったのかというような、細かいところまでのアーカイブ化はというのは、ほぼできていない状況です。

委員：

そうですね。そこまでとすると、何かその仕事がまた大変になってくるとかするので難しいなと思いつつ、従来の美術館が設定している美術史から外れてくる市民の活動に、どう目配りしていったらいいのかというのが自分自身のすごく悩みというか、自分たちが美術の枠を設定してしまっているのではないかと、というのは結構気になる場所なので、よその美術館はそのあたりをどう目配りしているのかなと、ちょっと気になったので聞いてみました。

何というか、企画展並みのアーカイブをちゃんとやってほしいとか、そういうことではないんですけども、お答えいただいてありがとうございました。

委員：

確か、前期か、前々期かにも同じような意見が出たと思うんですけど、市民ギャラリーで今まで大きな展覧会、企画展示室でやってもいいような素晴らしい展覧会も幾つもやってきたので、もしも履歴が残っているのであれば、今、ホームページもしっかりできましたので、これもデータベース化するのは、ぜひやっていただきたいと思います。

それから人数なんですけど、利用者人数のカウンターの仕方が、この公開制作室と市民ギャラリーとは多分違って、市民ギャラリーは主催者がカチカチと数を数えて、美術館に報告している。公開制作室は入ったら自動の装置でカウントする。でも、同じように自動装置でカウントするのが正しいような気がします。同じにしたほうがいいんじゃないかなと思うのですが。

事務局：

若干補足させていただきます。市民ギャラリーは、基本的に利用者への貸出しスペースなんですけれども、そのスペースを使って、例えば市民の方の協力を得ながら、美術館も一緒になって企画をする展覧会というのがあります。例えば、市内の本当に結構実績のある作家さんから相談を受けまして取り上げることもあります。あるいは美術館側が主体となって行うこともあります。それから例えば、現在は行っていないんですけども、数年前までは武蔵野美術大学の彫刻の研究室と連携してのゼミでの展覧会というのを行ったりしていますので、そうしたものの、結構、美術館がある程度関わったものについては様々なデータというのがありますので、その辺りについては今後まとめていくことは可能かなと思っています。

それから、市民ギャラリー入場者数のカウンターの仕方。今、委員からお話しされたとおり、主にこれ主催者からの報告を累計した数字になっていまして、主催者側がカウントした数字、それをまとめ上げるという形の数字になっております。

会長：

なかなか利用者数のカウントは難しいんですよ。例えば、金沢の21世紀美術館なんかは全方位から入れて、あちこちに通路のところに赤外線のカウンターがついていて、この数本当かな？というような数字が出てくるわけですよ。ではみんなそうやるかみたいな話になっちゃうんですけど、やっぱりさっき冒頭で、今回の利用拡大というところで、やっぱりこれ数じゃなくて質なんじゃないかというところだと思うんですよ。だから、ある程度見せる数字というのはつくる必要もあると思いますけどね。その辺の兼ね合いが、加減が難しいところかなと思います。

他にどうでしょうか。

委員：

今、市民ギャラリーのお話が出たのでお伺いしたいんですけど、貸出しのシステムだとか、応募の数、そういうにぎわい具合というのはどうなんですか。空いちやう時期があるとか、争奪戦になるとか、その辺はどうなんですか。コンピューター上で管理されているので

しょうか。

事務局：

市民ギャラリーの予約につきましては、紙の台帳で管理しています。去年の令和4年度でいいますと、いわゆる使用率、開館に対する使用率が約64%ということになっております。

予約については、1年前の毎月1日に利用受付を開始します。ですので、例えば、今、7月30日ですから、7月30日を使いたいというのであれば、1年前の7月1日から予約ができるということになっていて、その予約開始日に、1団体だけ申込があればもちろん当選ですけれども、2団体以上あった場合は午前中まで受付をするだけしておいて、抽選で1つに決めると。ただ近年、抽選になることは、1年に一度ぐらいの割合になっております。

事務局：

時期によって、非常に混み合う時期と空いている時期というのがございまして、ちょうどこの夏の7月、8月ぐらいの期間に市民の一般の方のご利用というのがあまりない。夏の暑い時期はあまり市民ギャラリーの利用がないんですね。

人気の時期として、やはり秋ですね。市民芸術文化祭という市のイベントがあるので、そちらが優先になってしまい、市民の方がなかなか入れないという状況もあるんですが、秋の時期、他に4月、5月頃も、結構人気がございます。

委員：

決まった団体さんが毎年やるとかということもあるんですか。

事務局：

毎年、同じ時期に同じ団体さんが利用しているという例もいくつかございます。

委員：

先日市民ギャラリーで拝見したグループの方は、ほとんどプロという感じで、個展ができるような個性的な作家さんが何点か出していて、次のコーナーに行くとまた違う作風の、もうプロで本も出されているような絵本作家の方の作品があって、大変楽しめたんですね。中には、グループで自分たちで趣味で絵を描いているから、という方もいて、これもありだと思うんですよ。くじ引きだから展示内容の質で選んでいるわけではないですよ。

事務局：

はい。

委員：

早い者勝ち状態になっているわけですね。

事務局：

そうですね。

委員：

だから、そこで、例えばものすごく実力のある方がやりたいと思っても、素人さんの団体が先に申込みしていれば、そちらが優先ということになるということですよ。でも、この空間はそれでいいのかなとちょっと思いました。

例えば、「ばれたん」というのはとても子供向きですよ。お子さんが楽しんでいてすごくいいなど、例年やっていることだからいいなと思うんですけど、美術を見に来たという人にはちょっと食い足りない感じがあって。その一方で公開制作室があって、こういう活動をしていらっしゃる作家がいるんだ、ということを知ることができたので、そこでものすごくバランスが取れている気がしたんですね。

以前に市民ギャラリーを拝見したときは、やはりこういうものだろうな、というぐらいの、こういう言い方をしたら語弊がありますが、素人の方が楽しいサークル活動をやっているという感じがしたときがあったんですが、だんだん市民の人たちもプロになってきたんじゃないかという感じがしています。これも美術館の活動が良い方向に向かっていることによってそうやってきたんじゃないかなという気がしました。

会長：

ありがとうございます。他にどうでしょうか。

委員：

私も先ほど話があった植竹邦良展が、全然知らない作家さんだったんですけど、見てすばらしいなと思いました。しかも、府中ゆかりの方ということで、説得力があるなど。公開制作の方もそういう方が登場していますけれども、身近にそういうアーティストがいるんだなというところで、府中もすごいなと思いました。作家さんにとっても、満足感があるのかなという気がします。

「ばれたん」についてはあまりよく認識していなかったんですけども、ばれたんとむら田というかわいい、夢に出てきそうなとか、何か癒やされるような感じでとてもかわいいなと思いました。毎年楽しみにしていらっしゃる方、子どもたちがいるとすれば、やっぱり毎年こうやって繰り返しやっていくことで、府中市美術館といえればばれたん、みたいに定着してくるのかなと。

企画展の、毎年の「春の江戸絵画まつり」もそうですけれども、府中市といえれば、あと昨年の「アーツ・アンド・クラフツとデザイン」ですかね。これもやっぱりたくさんの方の入場者数があって、やっぱり府中市といえればデザインっぽい企画をやっているのかなというところで、皆さん注目していらっしゃるのかなと思うので、繰り返しこの同じような企画展をやることで、府中市のカラーになるというのは、うまくいっているのかもしれないし、また、今後新しいジャンルを開拓していただいて、つくりたいところを作っていけるといいのかな、という気がしました。

あと、多分せっかくこういうのがあっても、もっと人数を、入場者数を増やしたいとすれ

ば、やっぱりPRをもっとやればいいのかというのを、せっかくやっているのに知らないといらっしゃる方がまだまだいるんじゃないかというのは感じます。

例えば、SNS、皆さん考えは一緒だと思いますけど、SNSで発信していらっしゃる美術館がたくさんありますけれども、やっぱりせっかく若い学芸員さんも入られましたし、そういうのが得意な若い方が担って発信していくと、若い客層が自ずと掴めるのかな、と。ただ私はあまり得意ではないので、具体的にどうすればいいか分からないんですけど、詳しい方にやっていただければ、いう気がいたしました。

会長：

ありがとうございます。SNSはどんな感じなんですか。

事務局：

府中市美術館のSNSとしましては、まずTwitterがございまして、Twitterは、私が広報担当者として日々の投稿をしております、最近では1日1回投稿しようということで、たとえば今、開催中の展覧会、ぱれたんサマー開催中ですよというような内容、簡単なものなんですけれども、それを必ず1日1回は投稿するようにしています。SNSは小まめに、地道にぼつぼつ投稿していくことで、それを見てくださるフォロワーの方というのが増えていくというところがあると考えています。あとはそれに加えて、展覧会情報だけではなく、常設展示でこういう作品が見られますよ、ですとか、美術館の中にショップやカフェがございまして、そういったところでこういうグッズを販売していますとか、カフェに行くとか、期間限定のメニューがありますよ、とか、展覧会や美術に直接関係するところだけではなく、そういった市民の方々が興味を持ってくださるようなトピックを交えながら、府中市美術館はこんなところなんですよ、というところがアピールできるような内容を、色々探して発信するように心がけております。

あとはYouTubeもございまして、YouTubeでは展示の内容の紹介ですとか、あとアートスタジオや公開制作の様子など、動画で発信することがふさわしいと思われる内容について発信を行っております。

会長：

ありがとうございます。他にいかがですか。

委員：

私は、今、お話を聞いていて、ほとんど内容が分からないのですが、逆にそのためにここに出席させていただいているのかなと思っております。私は商店街連合会からの依頼で来ていますが、私の店というのもやっぱり駅近くなので、ここはちょっと遠いんですよね。なので、もちろんたまにはこちらにも伺いますけれど、こういうものを常時展示しているとか、そういったことの情報というのは全くないので、そこをもっと広げるために学校の先生ですとか、お子さんたちがみんな来るのがどうなのか、ということの意見をお話する会議なのかなというふうに考えています。

美術館さん側のお話を伺っていても分からないことが多くて、それを分かるためにこういうふうには、SNSとかYouTubeもそうなんですけど、商工まつりとか、そういったイベントがたくさんありますので、わりと駅に展示とか見えるんですよ。よさこい祭りなんかもそうなんですけど、そういうわりとそんなことというように結構皆さん見ている、集客があったりするんですね。そんなことを提案させてもらったりするのも私の役割かなと思って、今日ここに来させていただいているんですけど、はい。ちょっと離れているので、今日、私も来るときもバス停はどこかなというのを探して、7番乗り場ですよと聞いてきたりとかというの、何か案内があったりすると、美術館行きのバスはここみたいな、そういったこととかもあったらいいのかなというふうに。来やすく。

あとは、いろいろイベントをよくやるのでそういう関係なんですけど、イベントの中で美術館の方たちと連携されて、アーティストの方が描いている絵をどこかで展示するような、イベントの中でできるようなことがあったらいいなというふうに私は思っております。商業連合組合として、やっぱり府中市をよくしていきたいと思っておりますので、商業だけではなくて必ず美術とか芸術というのがすごく大事だと思うので、そこを連携して何か一緒にできたらいいなというのをすごく考えております。

会長：

それぞれの委員さんの立場で、どんどんご発言いただければと思います。

委員：

ありがとうございます。

会長：

よろしく願いいたします。

委員：

こういうポスターやチラシは、商店街連合会の事務所などにありますか。

委員：

ないですね。

委員：

置く場所も、ここはよくて、みたいなのがありますよね。

委員：

何か、お子さんが来そうなところとか、今の企画だったら。そうじゃなくても、喫茶店とかよく町に置いてあったりするのが普通なんですけど、どの程度そういうものが行きわたっているのかなというのは、こちらは分からないものですから。

委員：

そこを連携してやるのがいいですよ。

委員：

そうですね。それはいい御意見だと思います。

委員：

うちはコンビニを運営しているんですけど、そこだったら大きいポスターでばーんとあるとか、お子さん無料とかね、そういうことならもちろん大丈夫です。言ってもらえれば。

委員：

そうですね。

事務局：

若干補足させていただきますと、こういったポスター類、それからチラシ類を置くところが、まずは公共施設ですね。それから学校など、というところで、それ以外に開館当初から市内の商店含めて御協力いただける方に声をかけて貼らせていただいているところがあります。近年なかなかその名簿といいますか、新たに声をかけるとか、それからリストを更新していくということが追いついていないというのが実情です。ですので、町中で何件か貼っていただいているお店とかもあるんですけども、全ての声を、今、拾い上げられていないところがありますので、今のお話、事務局としては非常にありがたい形ですので、またそういうふうにしていけたらいいなと思います。どうもありがとうございます。

委員：

そうですね。個人的によくお願いに来られるんですよ、こういうポスターを貼らせていただけますか？と。もうそんなので全然良いと思うんですよ。小学校のよくある児童見守りのとかも、よく来て。貼らせてもらえますか？みたいなものがあるんで。それは個人的にその店主の判断なんですけど、やっぱりこういうことも府中市のためというか、全てにおいてと思うので、うちはもう全部本当に置かせてもらうのでどこでもいいと思います。そういう連携が取れて、そういう名簿等があればですよ。ぜひ、協力させていただきたいと思います。

会長：

ありがとうございます。他にいかがですか。

委員：

ちょっとお聞きしてみたいんですが、美術館によっては、金曜日は夜までやっているというところもあるじゃないですか。もちろんその場所の問題もあると思うんですけど、あーいーうのは一般的にどれくらい効果があるものなのか、ご存知の方がいたら教えていただきたいです。それから、さっき他の委員さんもおっしゃっていたことで、ここはちょっと遠いんで

すよね。わざわざ来ようとしないと来ない。だから、たぶん市外からはちょっとわざわざ来てみようとするんですけど、市内からは逆になかなかついでに行くというふうにはならないところがあって。例えば府中の森公園や、府中の森芸術劇場で何かイベントがあるときには時間延長して開館するとか、例えば夜桜の季節ですとか、今みたいに昼間すごく暑いのでなかなか家からは出にくいところがあると思うので、何かお祭りみたいなことがあるときだけでも、そういうことができないのかな、難しいのかな、と思ひまして。

会長：

どうでしょうか。

事務局：

実施できるかどうかの問題は、ちょっと別の問題として、夜間開館、実際、市立美術館で行われていることというのは余りないので、私の前に勤めていた美術館のお話なんですが、私は北海道の美術館、2か所に勤めていまして、いずれもやはり主要ターミナルから外れている公園の中にある美術館です。立地条件としては、この美術館と非常に近いものがあります。周辺が住宅地域で、アクセスが地下鉄の駅から15分、歩いて10分ぐらいなので、ここよりは少し近いぐらいなんですけれども、とって、例えば6時、7時とかという時間帯に多くの人立ち寄りやすい環境ではないところなんです。そうした美術館で夜間開館を行ったんですけれども、夏場は定期的に行っていたんですね、曜日を決めまして。一つは、まずなかなか定着しなかったということがあります。夜間開館をやっているという情報が伝わりきれなかったということ。そういうこともありまして、あと周辺地域は余り人が頻りに歩いているわけではないので、ぱっと見で入るといった環境ではなかなかなかった。ですので、夜間、夏場の非常に集客が多く望める展覧会でも、夜間に来ると空いているよ、とアナウンスしていた経験があります。

この点のことについては、それぞれの美術館によって状況等も違うと思ひますので、私のほうからももしそのような事例がありましたら、委員の方から、もし参考になる事例とかありましたら、お聞きしたいと思ひますけど、いかがですか。

会長：

うちは府中市さんと非常に近い環境だと思ひますよ。交通不便で、公園の中で。花金になる以前の、まだ土曜日が半ドン時代に、土曜の夜の開館をやったんですよ。しかし全然来ないですね。4年か5年やったけれど。当番は大体、その当時、駆け出しの学芸員が1人で留守番しているみたいな感じなんですけど、来ないです。全然来ないですよ。光熱費、監視員さんの人件費、色々な事考えると、とてもじゃないけど。4～5年で辞めましたね。今でも、今、よほど1日に3,000人、4,000人入る展覧会だと、夕方の4時、5時、6時までいらっしやいますけども、そうでもないという展覧会をやっても、4時半ぐらいになるとお客さんが帰るんですよ。やっぱりちょっと不便なんで、だからやっぱりそれぞれの、たとえば六本木はね、終わった後また楽しい世界が待っているから、やっぱり付加価値がその土地にあるかどうか、その美術館近辺にあるかどうかというところがすごく大きい

ですよ。だからうちの美術館のある砦公園というのはものすごく大きい公園ですけど、あそこで東京都に斎場でも建ててもらおうとかね、毎日お通夜の前に、お骨上げの前に美術館へどうぞ、とかね。いろいろあるなという。

実際にオランダなんかだと、病院と教会とそういうセレモニーホールと文化施設が同じエリアにあって、いわゆるホスピスというか、最期までその文化的な環境を整えるというふうにごく何ていうのかな、壮大な計画のもとにやっているというところもありますけれども、夜間開館はやっぱり場所を選びますよね。北海道だったら大変ですもんね、ちょっとね。現実的じゃないなと聞きながら思っていましたけどね。

委員：

私の美術館は六本木にあるので、おっしゃるとおり、見終わった後にお店に寄ったり、というのはあるんですけども、結局のところはお客様の数は開催している展覧会の内容にかかってきます。

ちょっと前にやっておりましたルーヴル美術館展などは、うちが金曜日と土曜日に8時まで開館させていただいているんですけど、会期後半のほうの金曜日、土曜日になってくると、その時間でもお客様いらっしゃるということもあるんですが、会期前半はかなりゆったり見られるというような感じだったり。

公募展の方々は基本6時で、8時まで開いているときでも6時でお閉めになってお帰りになられる方がほとんどです。まだロビーは開いていて、企画展示室がやっていたら開いているという感じなんですけれども、コロナ前は夏は9時まで開けるようにと、国のほうから言われたこともあったりして、9時までになると、さすがに8時過ぎてくるとそんなに多くはいらっしゃらないんですが、コロナ禍以降は電気代の高騰もあり、もう閉めたいというのが美術館の本音などところではあるんですが、展覧会が開催されているときは開催をさせていただいていますが、あの大きな空間をやっぱり冷やしたりとか、随所にやっぱり人件費を配置するので、一緒にやっている共催の新聞社さんたちとはどうするという話、ここどうするみたいな、どっちがどの費用を持つみたいな生々しいお話などもあったりして、ただ夜間開館のほうは国のほうから言われていることなので、スポンサーさんのほうが出し渋られたときは、国が出さざるを得ないとか、そういうような感じでやっております。

ご参考になるか、前におりました島根県の美術館は、日没後30分の閉館という宍道湖という湖で、小泉八雲が宍道湖に落ちる夕日が美しいということを文学で書いてくださっているんで、開館当初から日没後30分の閉館というのを義務づけられていて、夏は15分ずつぐらいの刻みで変動しておまして、ただ冬になると、じゃあ4時半で日没だからというふうにはならなくて、10時、6時が基本時間で、6時よりも前に日没がある場合は6時閉館というような形で、夏になるにつれてどんどん長くなって行って、一番夏至の頃はもう9時近くまで、8時45分開いているというような感じで。

委員：

それは素敵ですね。

委員：

はい、当初から非常に注目もされたんですけれども、玉造温泉などもあつたりするので、観光客の方もたくさんいらしていただいているのですが、さすがにそのお時間は皆さん温泉に入られて、たださすがに20年たつと、もうあそこは遅くまで開いているというのが定着していますので、ガラガラというほどではないですが、ぼちぼちお客さんいらしていただいているのですけれど、そこにやっぱり定着するまでというのがすごくやっぱり時間もかかりましたし、本当にそのことがその地域で必要なかどうかということは、よくよくお考えになられてやられるのがよろしいかなと思います。

事務局：

ちなみに、この美術館は開いているのが10時から5時までなんですけれども、1日の間のお客さんの数を見ますと、11時半から1時ぐらいまでというのはものすごく少なくなるんですよ。あとは4時以降、4時過ぎると本当にかくんと落ちるという形で、どうしても府中市の方が多いたと思うんですけれども、皆さん本当に規則正しい生活を送っているのだな、と思ったりします。美術館がどのような立地にあるかも重要なんですけれども、単に駅から遠いとか、ターミナル近いとかそういうことだけではなくて、その館がある街の性格とかも関わってくるのかなと。そこに入ってくる人、働いて住んでいる人たちのことというのもちょっと関わってくるのかなという気はしています。

館長：

私も先ほど委員のほうからお話が出ましたけど、私は六本木の国立新美術館で、公募展に関係しているんですね。独立美術展というのと、二紀展というのを2つ一緒にやっているんです。あるときに、コロナ前でしたけど、やはり延長して夜間までやりましょうということになったんですけれど、結局どういうことになったかといいますと、費用が非常にかかるというのと、もう一つは人員が結構要るんですね。空間が大きいですから、先がどういう状態なるかというのがやっぱり心配があります。それともう一つは、六本木にありながら、じゃあ、公募展に来るよという人がそんなに多いわけではないので、がくっと減りました。

もう一つは、企画展のほうの夜間の展示があるときには、そちらのほうから帰りに寄ったという人が多かったんです。結局コロナがあつて、その後再開というのは話がまだ出ておりませんが、極めて効率がよくないという感じはしました。

でも、先ほど会長のほうからもありましたように、定着してくるとまた違った、つまり美術館はいつも金曜日と土曜日は夜にやっているんだよということになれば、それはまた違ってくるんじゃないかと。ちょっと時間がかかるかと。コロナが全て、何というか、今までのしきたりみたいなものを壊したのではないかと思います。ど

会長：

やっぱり何か面白い方法があるなどは思っているんですけど。

委員：

ただ、とても観客数が多いんで、特に西洋のものをやると増えるということは、資料の数値で見ていただいても分かると思うんですけど、そういうことが分かっているときには、夕方この時間、つまり働いている方が仕事帰りにでも見られますよ、というような形の、ただこれもポスターじゃないですけど、宣伝の問題ですよ。あるいは足の便みみたいなものが、またこんなに暑いときは、じゃあ昼間の間、昼寝タイムで休みます、閉めます。その代わりに、夜の涼しいときにおいでください、みたいな企画をやるとか、何かそれを新たに打ち出すという、特にこんなに暑い夏に、日中の、今、11時からお昼を挟んで人が来ないんだったら、その間閉めまして、その代わりに夜の涼しいときにおいでください、みたいにするとか。働いているほうも、その分延長したら給料をたくさんもらわないといけませんよ。だから、そこもちょっと考えなきゃいけない問題があると思います。係員さんのご苦労とかそういう問題もすごくあるから。

でも、本当にこんな夏がこれから先も続くのだったら、日中のときには家から出ないようにテレビでも放送しているわけですから、そして夕方涼しくなったら美術どうですかという、それもありかなと、今、ちょっと思っていましたね。

館長：

私、2か月ぐらいルクソールに滞在して、模写の収録をしたことがあったんですけど、ルクソール美術館はエジプトの美術館ですけど、夜間しか開けない。つまり、午前中も午後も一切。つまり40度、50度になってきますと、これは外に出ることが難しいので。急に冷えますから、ほんと寒くなって、セーターなんか着て来るといって、非常に変な生活でした。そういうところもありました。

委員：

だから、本当に雪がものすごく深い美術館というのが、普通の美術館のように開いていなきゃいけないというのもおかしな話なんですよ、考えてみたら。

そういう点では、本当、美術館によって開館時間を非常に長くしたり短くしたりするような、それこそ島根のようなことも、これから先、この気候がそんなに元に戻ると思えないとすれば、やはりフレキシブルに考えねばならないですよ。

ヨーロッパの場合は、もう金曜日の夜は、大体土日が休みになるということが分かっていますので、夜更かしという感じで、夜8時、9時までというのは普通になっています。観光客が今はインバウンドでかなり来てくれているので、そういう人たちにとっては遅くまで開いている、あるいは動きやすい時間帯に開いているということが、ものすごくプラスになることだと思うんです。

ただ、そういうときは大抵お店屋さんとか、ちょっとグッズ買いたくてもみんな閉まって、あそこ5時半で閉めていますとか何とか言っていて、何も買うことができないみたいなことにもなりましたけれども。

会長：

岩手県の美術館の人と話していて、なるほどと思ったのは、「冬場なんかお客さんも来な

いでしょ」と言ったら、「冬場のほうが多い」と言うんですよ。つまり、他に行くところがないから。車社会だから、美術館行けば楽しいし温かいし、だから冬場のほうがお客が多いと言うんですよ。へーと思いましたけどね。そういうこともあるんだと思って。車が主な足になっている美術館と、最寄り駅が近い、濡れずに駅からすぐ行けるみたいな環境でも、全然変わってくるだろうな、というのもあるし。

他にいかがですか？

委員：

小・中学生のパスポート、提示していただいたら無料で美術館の利用をさせていただけるようなシステムになっていると思いますが、その辺は非常にありがたいな、と思っております。

また、定期的な校長会など、月に1回のペースで市内の小中の校長が集まる会議をやっているんですけども、そのときに、美術館でいろんな情報を、展覧会があれば、その宣伝のポスターとかをいただいたりして、また、後日なんですけど、学校に子供たちの人数分、いろんな宣伝をいただいたりして、もちろん配布したりして、子供たちにPRとかもちろんしているところではあるんですけど、そうしたところを、また、学校としても地道にといいますか、現実的には、中学校であれば、美術の教員にちょっと任せっきりと言ってはあれなんですけど、だいぶいろんな具体的なところは美術の教員に口頭でアピールしてもらったりなんていうところが主になってしまったところはあるんですけど、なので、何か大きなイベントといいますか、取組があるようなときには、学校として、また何か市の小学校、中学校としても協力できることをやっぱり考えていかなきゃいけないのかな、と率直に思ったりはしました。

ちょっと私もこういう美術館の運営的な会議に参加させていただくのが初めての経験なので、非常に新鮮な刺激を受けているところがあり、何点かお聞きしたいのが、例えば入館の人数だとか、市民ギャラリーの使用率というんですか、そうしたことによって、例えば何でしょう、美術館の運営全体の予算とかにそういうものが影響するのかどうか。また、作品の収集活動について、基金があつて、先ほど2億円非常に立派だというようなお話があつたと思うんですが、それが何千万か使って〜という、基金の運用システムというんですかね、それがどういうふうなシステムになっているのか、何千万か使って、戻して、またまた2億円になったみたいな、そんなお話があつたと思うんですが、じゃあ、実際その辺の仕組みがどんなふうになっているのか。また、作品を購入したりするときに、何か市にゆかりの方の作品を優先的に購入するようにするとか、もちろん何かしらのお考えがあつたりすることだと思うんですけども、そういうときに基準、どういうふうはこの作品を購入するような方向性をお考えになっているのか、お聞きしたいです。

事務局：

はい。そうですね。まず、入館人数とか使用率というのが、美術館の予算状況に反映されるのかということなんですけども、これらが現状、直ちに反映されるという状況ではありません。入館者数が多かったから、翌年の予算が豊富になったり、少なかったから削られると

いう状況では、現状ありません。

ただ、どうしても美術館が必要か、この市にとって有用かという議論は出てくるものですので、この活動、入館人数が全てではないとはいえ、明らかに少ない状況が続くようであれば、もっと頑張れよ、という意味での非常に強いプレッシャーを受けることはあります。

それから収集活動、基金のシステムなんですけど、2億円というお金は、言ってみれば貯金と申しますか、別立てのお財布になります。美術館の運営の予算というのは、市のほかの財政と同じように、その翌年、翌年に必要な展覧会を実施するための費用というのを、その都度その都度予算の要求をしていきます。

ただ、美術作品というのは非常に高額なものがあったり、それからその瞬間に市場に出てきてしまって、今、押さえないと他の方、個人もそれから他の美術館も含めまして、早い物勝ちといえば早い物勝ちで取られてしまうと。悠長に、今、これがあるので、基金幾ら必要なのというようなことを工面してお金を新しく要求すると、間に合わないことがある。でするので、そのために作品の購入に特化して使えるお財布、貯金のような予算を2億円用意してあると。作品の収集が必要になったときには、この基金の額を上限額として、そのお金を使って買っていくというような仕組みになっています。

実際、使えばその基金からお金はなくなっていくんですけども、府中市の場合は4年ごとに基金の使用状況を見て、じゃあ次の4年間の貯金、お財布は幾らにしましょうねというような形で、別立てのお金を確保している。それが、令和3年度末にもう1回2億円を取って、その2億円を使って、というような形になっております。

それから3つ目、作品の購入の方法、基準ですけれども、先ほど私の説明の中でも冒頭でお話ししましたが、府中市美術館の作品の収集というのは、まず3つの方針を立てています。

1つ目が地元、府中、多摩、ゆかりの美術館ということ。これはどこの公立美術館でも設定している地元のことをまずメインに置きましょうということになります。

それから、2つ目が江戸から現代まで続く美術という、日本の近代、現代の流れを見るために、絵画、特に西洋から入ってきた絵画技法を中心としてつくられた絵画作品、洋画といわれるものですが、日本の江戸から始まる近代の流れを後追いしようという方針があります。でするので、逆に言いますと、日本画ですとかいうところには、実はそれほど力を注いでいないといえますか目を向けていなくて、特に日本の近代の絵画表現を中心としています。

それから、あともう一つの視点が、現代の美術ですね。この府中市周辺には多摩美術大学、武蔵野美術大学など、ちょっと離れていますけれども大きな美術大学があったり、東京の西側というのは、比較的多くの美術家さんたち、現役の方たちが暮らし、製作している場所になりますので、そこで日々生まれていく現代の美術作品というのに注目しようと、この3つをまず方針として立てています。

その中で、それぞれの作品というのは、まずは学芸員、これは美術の専門家なわけですが、それが日頃から様々な展覧会を見たり、情報を得て、所蔵作品と兼ね合わせて、どこの作品が抜け落ちているのか、今、注目すべき作家としてどのような人がいるのか、そういった観点から、美術館が収集すべき作品案というのを考えています。

これらの作品を、先ほど言った基金の状況と見合わせて、コレクションの状況と見合わせ

ながら、具体的な作品の購入候補というのを上げていく。そこですぐに決まりではなくて、それらの作品が美術館にとって収集するのが適しているかどうかというのを、外部の委員の諮っています。収集選定委員会という、別立ての会議になりますが、こちらには各分野の美術の専門家、大学の教員の方ですとか、現役の学芸員の方、それから画商さん、そういった方に、その作品を、府中市の美術館がこの価格で買うことが適切かどうか、収集することの意義、それから価格の妥当性、それらを諮って意見をいただく。中には、その値段高いよ、というような意見もございます。そうした意見を受けて、作品の購入の候補を確定します。そして、市ですので、議会に諮り、了承されると予算化されて、先ほどの基金からお金の正式に、その都度その都度、年度予算に移して購入するという流れになっています。

会長：

公立美術館は大体そういう制度になっていて、自分勝手にこれいいねと言って、じゃあ買おうという話には絶対にならないんですね。実際に、私なんかもほかの美術館の収集委員会に行って、そこでいろいろな話を聞いて、意見を言って、あるいはその作品がこういうふうに展開したらいいですね、こういう活用をしてくださいとか、あるいはこれを買うんだったらもうちょっと違う、この1点だけその作家から買うんじゃないでかとかね、いろいろ話があって。だから、2億円ですから、これは例えば8億円ぐらいとか10億円ぐらいあって運用していくというような、その運用していった果実を使っていくという考え方も世の中にはあるわけですけども。だからどちらかなんですよね、ものすごく大きな基金を積んでそこで運用していくのか、あるいはこういうふうに戻しながら運用していくのかというような形になっております。

他にいかがですか？

委員：

私も大それた意見というものは持っていないんですけども、昨年度初めて府中に着任しまして、この1年半感じていたことを幾つか、感想として申し上げたいと思います。まず広報活動、子供たち向けですね。あるいは我々教職員向けの広報活動が、本当に盛んにやってくださっているなと思います。

先ほど委員の話にもありましたが、校長がみんな集まって、校長会のときにわざわざいらしていただき、次の企画についてお知らせいただいたり、あと学びのパスポートもありますし、このチラシ配布、今回もそういうのもありますけども、こういう配布が非常に多いなというのを感じています。

それから子どもも、子どものうちから、小学生のうちから美術、芸術に触れさせたいという、その思いを強く感じます。先ほどの学びのパスポートもそうですけど、美術鑑賞教室ですね。美術鑑賞教室は去年も6年生がお世話になり、その後、そのとき撮った写真とともに、学びのパスポートを私のほうで、子供たちにまた投げかけさせて、「こういうのがあるよ」

「また行っておいで」という投げかけもしながら、少しでも子供たちが協力できる場所はしようとはしています。あとは府中市のゆかりのある方の作品展なども積極的に取り入れていただいています。あと昨年は、市内の図工美術の教員が、夏のワークショップをここで開

かせていただいたんですけど、そういうものも積極的に御協力いただいているなど思っています。

本当にそういう広報活動とか工夫されているところで、ありがたいという気持ちと同時に、最近、保護者に向けてすごく思うところなんですけど、例えばこういう子供が楽しめそうなものがあるじゃないですか。今の親は、昔もそうなのかもしれないですけど、両極端で、楽しそうなものがあるね、子供のためにこれを連れて行ってあげよう、という親と、子供だけが楽しめるのだと積極的に連れて行こうということじゃなくて、自分も楽しみたい、あるいは自分が楽しみたい、だから子供も一緒に、という親と、いると思うので、いろいろこれからも企画を考えていただくときに、子供が楽しめるというだけじゃなくて、どちらかという親が楽しめてしまう、親も楽しめてしまう、親のほうから積極的に子供に向けて、あなたこういうのを今度やるみたいよ、ぜひ連れて行ってあげるから、という名目で、親が子供を積極的に連れて行くような、そんな動きになるとすごくいいのかなと思います。

親も、すごい親らしい大人らしい親と、まだまだ子供のような親といますので、親を引き入れるようなことがどんどん出てくると、より皆様方の工夫も生きてくるのかな、と感じています。

会長：

ありがとうございます。

委員：

ぱれたん展、私も実は拝見していて、私この歳で、私は皆様のおばあさまの歳ですから、1人で拝見していて楽しくて、工作などもやってみたりもしたんですけど、やっぱり小学校の低学年向きという部分がかかなり強調されているな、という印象はあったんですよ。中学、高校ぐらいで多感な人たち向けというのになると、ちょっと・・・むしろ常設のほうは面白くて、だから若い方が結構、常設のほうをしげしげと見ているのはいいことだなと思いましたが、余りにも楽しいテーマパークふうになっている部分があって。これはこれでいいんだろうけれども、もうちょっと多感な、いわゆるハイティーンとかローティーンの人たち向けというのは、どういうものがあるのかなとか思いながら、拝見していました。

これはすごく難しい問題ですよ。小さい子ども向けに、全部平仮名でいろんな説明書も書いてあって、それはそれでいいんです。説明の内容もなかなか面白いので。これがもし、声を上げてそれを読んであげるような感じのイベントみたいな、さあおいでと言って、みんなに向かって、こうなんだよと親御さんが言ってくれるんだったらいいんですけど、勝手に読みなさい、だと、子供たちはやっぱり楽しい工作のほうに熱中してしまっていて。その後ろにある結構面白い作品が、ほとんど壁紙程度にしか見ていないという、その問題はあるなと思いました。

あと、私、皆さんが工作しているコーナーに、キャラクターを一生懸命いろんな形で作られた展示というのがありましたよね。あれはどなたが作ったものなんですか？ 何かバック、ポシエットみたいなものをつくっていたり、ものすごくいろんなバラエティがあって、そして見事なものもあって、このキャラクターがすごく定着しているなどということをよく思

ったんですけど、あれ一生懸命つくった人の名前を書いてあげればいいのだと思ったんです。やっぱりそうやってやった人がいるわけだから、その作者のプレートがあってもいいなど、そう思ったんです。

事務局：

ぱれたんというのは、この美術館のキャラクターであるんですけど、学芸員のメンバーが考えだして、そして、そのコーナーに展示してあるものは、学芸あるいは事務のスタッフがみんなで、2年に1回ですから、何をつくろうかというのを考えて、それをつくっているものです。

委員：

学芸員さんの名前のプレートを出してあげればいいんじゃないですか。すごくいいと思うんですよ。学芸員さんも単に難しいことをやっているだけじゃなくて、一生懸命工作でこんなにつくっているんだよ、というのは、ぜひ見せていただきたいなと思います。

委員：

何か食べるものがあつたりもしまして。

委員：

そうそう。それが本当にバラエティに富んでいて。あの展示は展示室がぎゅう詰めに入っていたから、もう少しゆつたりと見せてくれても面白いなと思いました。皆さんどうか分からないですけど。

お子さんたちは展示作品よりは自分で作ることに一生懸命になっていましたから、だから、何ていうか、私はてっきりこれが定着したので、観客の方、今までにこの展覧会を観た方が作られたのかなと思って。

館長：

プラモデルみたいなのがありますが、あれなんか毎年つくりたいというのと買いたい。どこで売っていますか、と聞かれます。

委員：

絶対そうですね。絶対そうだと思う。これは少しそういうグッズ研究をして、オリジナルグッズを売り出しては、と思いますけど。

館長：

学芸員が作ったプラモデルとか、キャラクターデザインとか、いろいろ元になるものはあるんですね。でも、彼らは自分が作ったと言っていない、言わないので、それを1回ちょっと検討してみたいですね。

委員：

この美術館全体の周知につながると思うし、そんなにどこで買えますかという意見があるということは、やっぱり目を奪われている人がいるということですね。

事務局：

鑑賞教室をやった後に、子供が家に帰って、そして、とても面白いものを見たからといって、ご両親に、美術館にすごく面白い作品があるから見てよ、と行って来られた家族がいて。そのご両親と話したんですけど、私は息子に美術館に誘われたんですよとすごく嬉しそうにされていました。そういうパターンもあるんだなと思いました。それを大事にできる美術館もいいかなと。

基本的に当館は収益制というところよりも、子供たちが来てもらいたいということを非常に強く、展覧会もよく非常識といわれるくらい廉価というか、安い値段でやっているんですけども、とにかく市民のための美術館を目指してきたというところで、市議会のほうでも理解をいただいているのかなというところもあります。

最近始めた企画で、新しい転入者の家族に、一度は美術館を無料で入っていただけるというチケットをお渡しするようにもなりました。

委員：

それは面白いですね。

事務局：

そのことで収益制から逃れるといいますか、うちの美術館が市のために役に立っているんだというようなスタンスを少しずつ理解していただいているのかなということもありますし、そういうお金にならないというか、集客に直結はしないけど、もう少し家族のメモリーとしての美術館があるよ、ということをアピールできるような。ですから、すごくお父さんたちが喜んで、息子に美術館に来てよと言われて誘われたんだよ、と、すごく嬉しそうにされている。子供に招待券を渡して、親御さんは無料になりますというのを子供に渡しておいて、親御さん連れてきてもらいたいなというふうなアイデアもちょっとあったんですけども、先ほどの親子が子供と一緒にというところは、とても大事にしているところでして。

予算を大きく減らされたときもあったんですけど、そのときに何を減らすか、展覧会を減らそうか、何にしようか、では小学生たちを連れてくるバス代を減らせ、と財政当局から言われたときに、展覧会事業費を減らしてでもバス代を確保しようという、当時の学芸員の決意がありまして。事業の目的のかなり高いところに子どもというところを置いているというのは、今までやってきたところです。

館長：

先ほど、委員のお話にもありましたけれども、例えば、小学生たちの鑑賞教室の経験者が、博物館実習のときに、「実は、私、小学校のときにここに来たんです。それからずっと美術館の学芸員になってみたいと思っているんです。」という話をされて、びっくりすることが

あります。

それから、街を歩いていて、私は府中の市民なので、この間あったあれは面白かったとかいう話をしてくださる大人、もう大人になっちゃっているんですね。小学生のときの面影がなかったりする人たちが声をかけてくださるということもあったりして、それが非常に楽しいなと思います。

それから、ちょっと話が前に戻りますけれども、美術館の持っている意味は何かというお話にもう一つ付け加えさせていただくと、その美術館は何を持っているか、どういう作品を持っているか。例えば、青木繁は府中にあるよとか、あるいは高橋由一、長谷川利行の作品がここで見られるよ、という、そういうのがあるというのが大きくて。つまり、美術館の格というのは、多分良い作品を集めているかどうか、良い学芸員がどれだけそろっているかどうか、その2つがあってこそ、企画が生きてきたり、あるいは他の美術館と交流ができるという、やはりこちらのほうも語りかけができる何かを持っている、ということが必要なんじゃないかと思います。

会長：

ありがとうございます。

終わりの時間が迫ってまいりました。結構色々お話をいただきました。府中市美術館の利用拡大、事業施設の在り方ということが大きなテーマになっていますので、これからまた次回、12月か1月ぐらいですかね、また、そこでいろいろお話をして、我々としての市への答申をまとめていければいいのかなと思っています。

今、委員からお話いただいたように、私のところの美術館も小学校の4年生、それから中学生が全員来ていて、それをもう37年間続けていますけど、いるですよ、博物館実習とかに。小学校のときにうちに来た子が博物館実習でうちに来たり。あと、今、もう築40年近くなって老朽化が進んで、特に上下水道の設備関係が急に壊れることが多いんですよ。それで、熱心に来てくれる水道屋さんがいて、すごく感じの良い人で、何かうちの掛かりつけのお医者さんみたいになっていて、それで「何でそんなに一生懸命やってくれるんですか」と聞いてみたら、「実は小学校4年のときに鑑賞教室に来て、この美術館のファンで、それからもう、美術館で仕事ができるんだったらどんなことでもやりますよ」と言って来てくれて、個人的にも付き合いができて。やはりそういう、長い目を見たときに、その美術館のサポーターをつくるということになってきているんですよ。

委員：

今、その話でいうと、うちの美術館に、今、企画展をやっている現代作家がいるんですけど、彼女は中学のときに学校の授業でうちの美術館に来て、そこで影響を受けて、今、企画展作家になって帰ってきているという。

委員：

それはすごいですね。

委員：

やっぱり子供のときに美術館に触れるのはすごく大事だなと。

委員：

子供は未来の芸術家ですよ。そういう意味ではね。

会長：

毎年というか、今年も人口減少率が0.65%、これ10年で6.5%、100年で65%となると、相当いろいろ社会のことが変わってくるわけですよ。この中で子供をどう考えるかとか、あるいは高齢の人たち、リタイアした人たちがどういうふうに次の世代を育てることに関わることができるか。つまり会社とか組織の中で若い人を育てるんじゃなくて、社会がどう育てるかという問題を、おそらく美術館や博物館という社会教育施設が担っていくということになるんじゃないかと、私は考えているところです。

多分皆さん一通りご発言いただいたので、次回、また溜め込んでいい御意見をいただければと思っております。

では、もう今日はこの辺にしたいと思うんですが、事務局のほうからまとめていただいて、今後のことなど御説明いただけるかと思いますが、はい。

事務局：

皆さん、ありがとうございました。本日、皆さんからいただいた意見、この場で出たお話などは、事務局のほうで整理させていただきまして、議論の資料となるよう、次回、会合の前にお送りさせていただきます。

なお次回の会合ですが、12月ないし1月頃の開催を予定しています。日程の調整は改めてさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、以上で第12期府中市美術館運営協議会第2回会合を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

— 終 了 —